

幼い頃の体験は年を経て

四季折々の自然いっぱい環境の中で育った子ども時代。関東平野のど真ん中で私は育ちました。

初夏になって麦刈りをしていると、麦畑の巣からひばりのヒナが飛び立ちました。梅雨の雨に打たれた紫陽花が七色に姿を変える頃、小川では蛍が飛び交い、竹ぼうきで蛍とりで夢中になって草むらで足を滑らし、川に落ちたこともありました。

七夕の頃になるといつせいに田植えが始まりました。親戚が集まって田から田へと次々と植えていく、まさに猫の手も借りたい忙しさ。子どもたちも幼い時から大人の仲間入り。苗運びや子守りが大事な役割でした。そしてあぜ道で頂くおやつが一番の楽しみ。夜は田植えをした人たちが

集まって大宴会。子どもたちは縁先で線香花火に興じました。

田植えがすむと、堰止めのコンクリートの上に無数の川エビが夜中に這い上がっています。「夜中に子どもがエビをとりに行く」と、川の神様が怒る」と言い聞かされていきましたが、かえって行きたくなるのが子どもの心情です。

そうした幼い頃の体験は年を経てもふるさとの思い出として一層なつかしくなります。そこで育まれた人と人とのつながりは心に深く刻まれています。

私たちは保育という職を通して、未来ある子どもたちの生命を育てています。豊かな心、人間らしいぬくもり、痛み・苦しみを乗り越える力

を培い、自分の人生を歩むことができるように、保育者としての責任を日々果たしていきたいものです。

(大津あいあい保育園長)



ふるさと群馬の赤城山